

## 渥美半島東南部に於ける洪積統層序

|       |                                                                                   |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn                                                                           |
|       | 出版者:                                                                              |
|       | 公開日: 2011-08-29                                                                   |
|       | キーワード (Ja):                                                                       |
|       | キーワード (En):                                                                       |
|       | 作成者: 黒田, 啓介                                                                       |
|       | メールアドレス:                                                                          |
| URL   | 所属:                                                                               |
|       | <a href="https://doi.org/10.14945/00005991">https://doi.org/10.14945/00005991</a> |

## 渥美半島東南部に於ける洪積統層序

黒田 啓 介※

渥美半島東南部に於ける洪積層については文献の項に掲げた如く、地形、地質及び動物化石等のすぐれた報文があるが、化石及び岩相により、この地域の堆積過程を考察するにはその層序が十分でなく、また若干の見解の相異を得たので、ここに化石産地と共に層序の概要を予察的に報告し、今後の研究の端緒としたい。尚、化石の記載等については別の機会に譲り、今回は省略することにする。

渥美半島洪積統の主体を占める砂礫は黄褐色を呈し、屢々、酸化鉄で汚染され、半島基部の高師原は著名なる高師小僧の産地として知られている。本調査地域内の東部太平洋岸の高塚・七根附近では標高60m程の海蝕崖が発達するが、西部の一色・赤羽根に至れば、半分以下に高度を減じ、一方、半島を横断して渥美湾岸に向つても同様に低く傾斜している。この地形的輪郭は大局的にみて地層面とほぼ平行関係にあるが、同一地層面であつても層理面の高度の低い西方地域にダイアステムが顕著にあらわれている。また、洪積層の主要部となつている下部の諸層の層理面が北西に緩く傾斜しているのに反し、最上部の礫層が南西に傾斜していることは古地理学上からみて興味深いものがある。

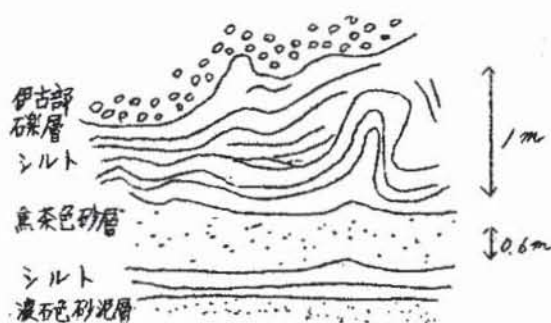
本調査地域内では古生層との境界面を除き不整合面は見られなかつたが、三面の顕著なダイアステムが認められたので、全体を渥美累層とし、次のように区分仮称した。尚、参考のために大炊御門氏によつて定められた層序と比較して表示した。

| 黒田 (1957) |        |        |      | 大炊御門 (1933) |      |  |       |  |
|-----------|--------|--------|------|-------------|------|--|-------|--|
| 渥美累層      | 赤土層    |        |      | 一色層         | 新居砂層 |  |       |  |
|           | 大草礫層   |        |      |             | 大草礫層 |  |       |  |
|           | 杉山砂層   |        | 神戸礫層 | 田原層         | 杉山砂層 |  | 豊南礫層  |  |
|           |        |        |      |             | 神戸礫層 |  |       |  |
|           | 高豊砂礫層  | 東ヶ谷砂礫層 |      |             | 豊島砂層 |  | 黒川原砂層 |  |
|           |        | 赤次砂礫層  |      |             |      |  |       |  |
|           |        | 豊南泥層   |      |             |      |  |       |  |
|           | 伊古部砂礫層 |        |      |             |      |  |       |  |
| 二川砂質シルト層  |        |        |      |             |      |  |       |  |
| 古生層       |        |        |      | 古生層         |      |  |       |  |

※ 静岡大学教育学部3年

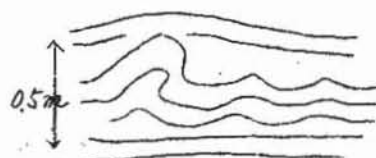
## 1 二川砂質シルト層

渥美果層の最下位を占める黒味を帯びた凝青灰色の砂質シルト層で、一部は薄い砂泥互層、または砂層となつている。この層は高塚東部の下部海蝕崖以東にみられ、西七根では上部に5mの褐色ないしは暗褐色の砂層を含み、層厚は7mとなる。下部の砂質シルト層は微細な



〔Fig 1〕A

高塚、西七根間の二川砂質シルト層中にみられる層間異常



〔Fig 1〕B

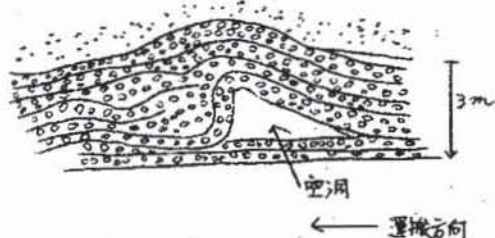
同じく東七根でみられたシルトの層間異常

波状ラミナと共にFig 1に示した如き層間異常がみられ、稀れにマデガイ・ウミタケ等の貝化石印象を漂木片と共に残している。また、この層は海岸より内陸に向うにつれて褐色砂泥層となることから、褐色砂層が広く内部に広がっているものと推定される。

## 2 高豊砂礫層

本層は岩相の変化と化石堆の特徴より、これを更に下部から伊古部砂礫層・豊南泥層・赤沢砂礫層・東ヶ谷砂礫層とに細分した。

伊古部砂礫層は豊南下部にはじまり、伊古部で5m、西七根では12mにも達し、下位の二川砂質シルト層を一見不整合に覆っているが如き様相を呈するが、東七根附近では海岸より内陸に入るにつれ整合面となるので、ダイアステムではないかと思われる。(更に研究を要する) この砂礫層は大体、下部より礫層、砂層、泥層と一堆積輪廻を示し、礫層は淘汰作用が悪く、硬砂岩・チャートから成り、泥質角礫も屢々含む。

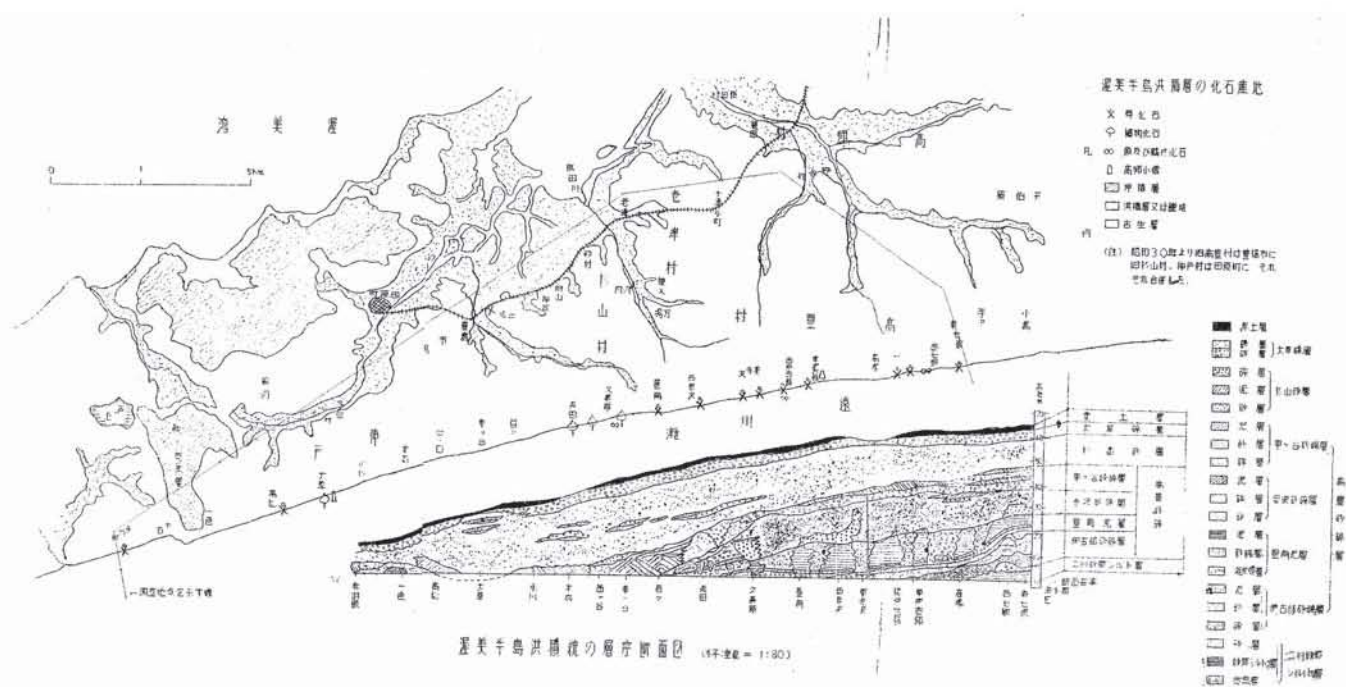


〔Fig 2〕

伊古部でみられる伊古部砂礫層中の礫の堆積状態

黒褐色をした砂層にはヤマトシジミ、ノマガキ、ナミガイ等の貝化石が含有され、一部は細礫まじりとなつている。上部の青灰色泥層は1mの厚さで連続し、特徴ある風化面をあらわし、ヨコハマチヨノハナガイ、シズクガイ等の貝化石を産する。

豊南泥層の層厚は5~15mで百々下部の褐色粘



土層よりあらわれ、伊古部砂礫層と整合に接する。この境界面上1~2mのところに鍵層として比較的良好的な白色火山灰層が浜田下部より七根まで連なっている。この層の主体である青灰色泥層は点々と孤立し、その間は褐色砂礫層に移化している。この泥層はヨコハマチヨノハナガイ、シズクガイの貝化石及びモミ、ツガ、ブナ等の植物化石を含み、稀に淡水棲の魚化石・魚鱗をも包含する。

赤沢砂礫層は平均1.5mの層厚をもち、礫結のわるい淡褐色砂を主とする層で、酸化鉄の汚染による水平ラミナ、雲母によるクロスラミナが認められ、太平洋岸では久美原、浜田間で消滅する。豊南泥層との境に、伊古部では4mの化石に乏しい青灰色泥層があらわれて整合するが、西赤沢、四七根では10°~20°で交差する層があり、いずれも東南方向より運搬されてきたものである。この層は北の内湾に近い神吉、向山、殿村、附近の2.5m以下の高さに淡褐色の見掛上の最下層となつて分布する。

東ヶ谷砂礫層は東ヶ谷東部で1.0mの厚さを持つ砂礫互層の背斜状ラミナを示すが、久美原以東では1~2mの硬砂岩、チャート、泥紋岩、塩基性火山岩、石灰岩より成る礫層となり、



Fig. 1  
久美原、浜田間でみられる層間関係で西部は折れている部分

層々、いわゆる偽礫を含み、一部は酸化鉄で汚染される。大炊御門氏によつて豊南礫層と呼ばれたものはこの礫層で、上部には0.2~2mの凝灰質泥層を伴い、伊古部ではヨコハマチヨノハナガイ、シズクガイ等の貝化石を含み、また砂とともに陸き寄せられたサルボウ等の貝化石が印象をとどめている。この礫層の分布は長上、根入、大清水をはじめ東部の2.5m等高線附近にかなり広く、太平洋岸では3.0~3.5mの高さに露出し、また、西方の砂礫層は水川西部で水面下に没している。一方、高松西部で最下部にあらわれ、一色で秩父古生層を不整合に覆っている褐色砂礫を主とする東ヶ谷砂礫層と同一層準のものであると推定しているが、これについては更に研究するつもりである。

### 3 杉山砂礫層

本調査地域内で最も広範囲に分布する褐色砂礫で、層厚は通常1.5~2.5mであるが高松より西に於いては次第に薄くなる。東ヶ谷、本前の太平洋岸下部にみられる凝灰質泥層を伴った砂礫層は大炊御門氏が神戸礫層と呼ばれたものに相当し、大草志田より浜田の北方に至る2.5m等高線附近によく広がっていて、硬砂岩、角岩を礫質とする淘汰作用のよい円い細礫層であ

る。杉山砂礫層の最下部は貝化石で知られる高松の青灰色砂泥層で、これより東方の東ヶ谷附近では高豊砂礫層との境界面が明瞭であるが、西方ではわずかに認められるに過ぎず、四方に向うに従い次第に高度を増すのは一色の秩父古生層の影響を受けたものだろう。

#### 4 大草礫層

大草礫層は調査地域内では太平洋岸に沿い普く分布する淡青色の特徴ある礫層で、その厚さは2~6mである。この礫層は高松・一色附近で下位の杉山砂礫層を侵蝕しているが、本前より東では整合に重なる。礫質は大部分が砂岩でチャート、角岩もあり、下部は大中礫の混合であるが上部は細礫の見事な平行ラミナを形成している。大草海岸の海蝕崖上部には杉山砂礫層上部より大草礫層下部にかけて二層の帯紫色砂泥層があり、二葉マツ、オニグルミの実を産出し、この直ぐ下にある砂層には高師小僧が多くみられる。また、一色附近では、礫層の上部は褐色砂層に移化しているが、半島基部では直接赤土層に漸移している。

#### 5 赤土層

大草礫層より上部に漸移的に移行する2mのラテライト状の赤土層で、下部は砂質となつてゐる。故大塚博士はこの層について「関東地方のローム堆積時代と略々対比できることは面白い」と述べておられる。

渥美半島洪積統より採集せる化石群に就いては近く改めて発表するつもりであるが、今後、更に調査地域を敷衍し、加藤芳朗先生の調査された浜名湖西部の洪積層との関係を明かにし、より広い視野に立つて対比を行いたいと考えており、また、古地理を編むことに努力したいと思ふ。

終りに貝化石の鑑定及び本稿の校閲等終始御教示下された当教室の土先生をはじめ、加藤、竹内、岐島、望月の諸先生方に深謝する。また、筆者の研究にあたり助言を戴いた京都大学の片平氏に謝意を表する。

#### 参 考 文 献

- (1) 1925 石川成章：渥美知多両半島と其の海岸 地球 3巻 1号
- (2) 1925 今村学郎：渥美半島西部に於ける汀線の昇降 地理学評論第1巻
- (3) 1925 石川成章：地理教材としての地形図(八)渥美半島 地球3巻 3号
- (4) 1926 M. Yokoyama: Fossil Shells from the Atsumi Peninsula, Mikawa  
Jour. F. S. Imp. U. Tokyo, Sec. 2, Vol. 1, Part 9
- (5) 1927 横山又次郎：三河渥美半島の貝化石 地球 7巻 3号
- (6) 1927 石井清彦：七万五千分の一伊良湖岸地質図編並同説明書
- (7) 1929 辻村太郎：日本地形誌
- (8) 1931 大塚彌之助：第四紀 岩波講座地質学

- (9) 1933 大炊御門経輝：渥美半島の洪積層 地球20巻 3号
- (10) 1933 大炊御門経輝：渥美半島の洪積層 地質学雑誌 40巻 477号
- (11) 1933 浅井治平：渥美浜名地方の地形 大塚地理論文集1巻 1-12
- (12) 1940 横山次郎：中川保：渥美半島洪積統の有孔虫類 地質学雑誌 47巻 564号
- (13) 1952 加藤芳朗：東海地方東部の洪積台地形成の問題 地質学雑誌 58巻
- (14) 1953 加藤芳朗：洪積期砂礫質台地の開析について 地学しづはた 第2
- (15) 1955 加藤芳朗：三方原台地の地形地質について 静岡県農産課「普及だより」  
土壌肥料特集号
- (16) 1956 加藤芳朗：遠州海岸部丘陵における水田分布と地質との一関係 地学しづはた 第9号
- (17) 1956 加藤芳朗：浜名郡湖西町の深井戸資料について 地学しづはた 第10号

## 安倍川上流大谷川流域の地質

笠 原 芳 雄  
神 間 貞 吉<sup>\*</sup>  
橋 本 行 雄<sup>\*</sup>

本調査報文は、安倍川源流部の砂防工事の為、建設省静岡工事事務所の要請により、建設省中部地方建設局作製の安倍川上流部平面図「図その1」同「図その2」の5000分ノ1地形図に基いた地表地質調査の結果を報告したものの要約である。

いわゆる東海道式河川の代表的な安倍川は、その源流部で大谷崩を生じてから今尚その流域に崩壊が続き、上流部まで広い河原を形成している。本調査地域は深い溪谷と多くの崩壊地よりなるが、これまで行われた地質調査は部分を概査に過ぎない。<sup>(3)</sup> 本調査は上記地形図の約14Km<sup>2</sup>にわたる部分を行つたものである。

調査の結果の諸考察に際し、鮫島・竹内両助教授に御教示を、又現地調査には建設省技官水野、大条両氏に移々御便宜を頂いた。共に記して厚く御礼申し上げる。

卒業生

※静岡大学教育学部四年